其三

清盛欲移法皇於鳥羽宮。有馳告重盛者。重盛大驚。急命駕赴之。入第門。族人皆擐甲鞍馬。旗幟成列將起。重盛睨曰汝等何以被甲。敵人何在乎。吾爲大臣大將。自非有冠賊犯闕。則不宜被甲也。清盛望見之。遽起表黑衣而出。數正襟々呰甲覩。謂重盛曰。吾察西光狀。如成親等乃其枝葉耳。間(ミダリニ)群小彙進。覬覦不已。而御以輕躁之君。何所不至。我欲且請幸一邊。以待事定。語未畢重盛泣數行下。久之言曰。重盛熟視尊貌。知家門已屬衰運也。重盛聞之。世有四恩。皇恩爲最。抑我門雖辱桓武葛原之胤。而降爲人臣。中微不顯。以平將軍之功。而不過國守。刑部卿聽內昇殿。萬人反唇。及至大人。乃陞太政大臣。以兒之不肖。且辱大臣大將。宗族駢植朝廷田園半於天下。叨恩極矣。爲官家所疾。誰謂不宜。而運命未艾。

讒人既謾。宜(下)論罪所當。退陳(中)事由。則公家豈有不霽威。何必草々爲也。兒又聞之。以王事辭家事。不以家事辭王事。況善惡較著者乎。重盛自六位至三公。沐浴君恩。不可勝舉。嚮背之決。自有在焉。素所撫循士。願爲重盛死者二百余人。保元之亂。源下野守。以敕命斬六條判官。兒在當時。以爲大逆無道不忍言者也。此非大人所親睹乎。欲忠則不孝。欲孝則不忠。重盛進退窮於此矣。生觀是慼。不若死也。大人必欲遂今日之舉。先刎重盛首。然後發且言且泣。舉坐感動。清盛曰。淨海以衰老爲此舉。非爲一身計。徒慮子孫耳。乃以爲不可。汝好計之。乃起入內

譯文

おほきおとゝの入道。院をとばの宮にうつしまつらんとす。と人のつげゝれば。小松のおとゝいみしうちうおどろきて。

いそき父入道どのにまゐりて。門にうち入れば。八みぎ甲を
き。うまに鞍おき。はたどもたてつらねて。ずでにうちいでん
とするさまあり。おとゞあまりのあさましさに。こはあにこ
とぞ。われは大將おれば。みかどにいむかひまつらんわたど
ものあるにあらざれば。身をよろふてとはあさドを。いとを
こなる人々かなとておしとゝむるほどに。入道どのはるか
に此ありさまをみて。さすがにはつかしとやおぼされけん。
俄におくに入りて黒染の衣とおそひきていでおはせど。と
もすれば去たあるよろひの見えんとすめれば。いかでみに
ドと襟などかいつくろひつゝ對面したるこそ。いとかたは
らいたけれ。入道どのゝいへるやう。われ西光のありさまを
みるに。權大納言どのらはとまれ。院のみ心こそいといぶか

しけれ。いかでうらみたてまつらざるべきといきまきつゝ
かたりたまへば。おとゞ涙をぬくひつゝきこえ給ふやう。い
といまはしきとあれども。こはわが家のほろびぬべき時の
いたれるにや。いかにとならば佛の御をしへにも。まづ皇恩
とこそはうけたまはれ。わが家は延暦のみかどの後とはい
へ。中ころ人かずにも入らで。いたくはふれにたるを。ずりや
うとありてほどもなく殿上ゆるされしだに。ためしあきて
といふ世の人いひのゝしりしを。今父うへにはおはきおとゞ
とありたまひ。おのれおちあき身に侍れど。内大臣にめされ
て大將をさへかけ。うからやからの莊園はひろき大八洲く
にの半にあまるほどあれば。つねに神佛のにくませたまふ
こともや。と空おそろしうさへぞおぼゆるに。朝廷のうちあ

ほおのれらをあしざまに聞ねあげんとするものありとききつれば。かしこくもつゝしむべきことゝこそ思ひしか。その人々のとかあらはれぬれば。かろきにこそはつみあふべけれ。いかでにはかに院を恨みたてまつるべき。いにしへより家をわすれて公事に仕へまつりしためしはあれど。かゝる事はいまだ聞侍らず。さきに義朝の朝臣の詔をもてその父をうしなひしだに。おのれらえもいはれぬよこさまのことよと心にくみしは。父上にもみそあはしたまひしとあらずや。おのれ朝廷につかへまつらんとすれば。天が下の人わらひにこそありぬべけれ。いきてかひなき命をながらへんよりは。とくころし給ひてさて後にこのことを思ひたちたまへねとて。かつあきかういさめければ。入道どのいとお

もてふせあるさまして。おのれ年老ぬれば。ほれてかくよからぬことをもおもひ立ぬれど。こはおのれがためにはあらず。わがそうを思へばなり。あてよ心にあかげそ。よきにたばかりてよ。とておくにはい入りぬ。

其四

五月。重盛造熊野祠祈死。歸獲瘍疾。適有醫至自宋。清盛欲使治焉。重盛辭以失國體。且曰兒之獲疾命也。遂不使治。法皇臨視其疾三月遂薨。年四十三。

譯文

さ月ばかり。内のおとゞ熊野詣し玉ふ。こは入道殿のひがと多きをうち歎きて命にかけて祈られつるありとか。やがてあつしくありぬれど。入道殿ゆゝしと思ひて宋(モロコシ)のくすしの

參れるを召んとしけるに。おとゝいなみていへるやう。今はこゝの醫(クスシ)だに頼むまゝドきをいかでかめすべき。抑もおのかが疾はさるべきとわりあおり。たゞかくあがらみ過し玉へとて。藥もくはず三月ばかりが程によわうなりて。薨(カセ)たまひにき齢四十まり三とせとあん聞えし。法皇はかねても疾をとはせられていとはしがらせ給ひしが。かくときこしめしては。いみしう歎かせ玉ひしとぞ。

其五

敦盛亦與知章同齡。望知盛舟馳之。爲熊谷直實所獲。是日直實冒曉向西門。聞城上有笛聲。及獲敦盛。見其腰挿笛。念嚮所聞者是也。乃請首於義經。幷其笛歸之經盛。

譯文

大夫とし十まり七。中納言どのゝ舟をのりみて。駒をいそかするほどに。熊谷直實とたゝかひてうたれぬ。直實は大夫の笛を携へあがらに討れしをみて。心におもへるやう。けさのあさけ一谷の城門にむかひし時。はるかに聞ゆるはあはれなるねにこそと思ひしか。さては此のわかうとありけりとます〳〵あはれにおぼえければ。やかて義經に聞にあげて。首にその笛をそへて父經盛に送りしとぞ。

其六

四人重衡在鎌倉欲削髮。而頼朝不許。因餽酒遣千手及工藤祐經佐之。祐經撾鼓。千手彈琵琶。重衡屬杯千手。朝吟曰。燭暗數行虞氏淚。夜深四面楚歌聲。頼朝微行。側耳戸外聞而憐之。

譯文

重衡は捕へられて鎌倉にありけるが。いかで髪をおろして法の道に入らばやとねがへども。頼朝ゆるしたまはず。一日酒をすゝめて。祐經と千手とをそのむしろにさふらはせてもてあし給ふに。祐經はつゝみをうち。千手は琵琶をなんつかふまつりける。重衡さかつきを千手にとらせて。ともし火くらくしてしば〳〵くだるぐしの涙よふかくしてよもにきこゆる楚のうたのこゑ。とぞうたひけるを。頼朝ひそかに外のかたにしのびてこれをきかして。いとあはれにおぼしけるとぞ。

大概是等の類あり。さて初學のともがらは。何の漢文にてもよろしければ。とかく數多く譯してよく其の味はひを知るべし

第六　四季雜文例

是れは。四季の中何にてもおりにふれて述べたる文をいふあり。ゆゑに此の作例は。甚だひろけれども。餘りに煩はしからんを省きて。今短簡なるもの八九章を左に掲げたれば。餘は準らへて知るべし。

橋上霞

ひとむれふたむれとうちむれゆくは。梅見の人なるべし。おのれはさる心なからねど。けさはゑひこゝちのいとこゝちよければ。今戸いしはまわたりそゝろありくに。衣ほさぬ家もあきまて日のぞかにて。帆あげたる船はみえぬばかりに風もふかねば。隅田堤のかたにと渡し舟ときはなてば。わしのすむといはれし山も。うすゝみにかきなしたるが如くある

かあきかにて。彼のふた國にかけわたしたる橋も〳〵

すみた川けさ立わたる横霞かすみは橋かはしはかす

みか。らばかりにみゆ」

俗解　○ひとむれは。一群也○うゝろありくは。散歩する也○衣ほさぬ云々は。日のよきを云也○帆あけたる云々は。風のあきをいふ也○わしのすむは。萬葉に。わしのすむつくばの山とあり○ふた國に云々は。兩國橋也。

朝鶯

雨あゞりあうはれて。朝日のかげさしのぼりたるに驚きて。やとらおきいでゝひむかしおもてのはしとみあけわたせば。露あがら匂ひてぼるゝ梅が枝に。鶯のほゝとあきたる。ゐもいわれぬさまなり。笠にぬふてふとよまれしも。かゝるを

りにやと思ひつゝけて。

朝ぎめりはあの露ちるうめが枝にかさやとりして鶯のなく」

俗解　○あゞりあうは。スッパリ也○やをらは。そろ〳〵也○はしとみは。半戸也○笠にぬふてふは。古今集に。鶯の笠にぬふてふ梅の花とあり○かさやどりは。立よりて雨の晴まを待つと也

春雨

曉の夢さめしにもあらず。さめぬにもあらで。なにとあうおきうきやうなる軒ばに。そぼ〳〵とおとつるゝは。ふり出つる雨あるべし。枕にかをりくる梅かゝもゑめやかあるに。ぬれてさひづる鶯のこゑはたものわびしげあり。いかにいき

たゐくやゐどおどろかされて。おきいでんとはすれども
ゐはものうさに。かのあかつきを覺えず。とかいふなる。からう
たの心も。思ひやられてなむ。」

俗解 ○そば〳〵は。ザア〳〵也○玄めやかは。シットリ也○ものわびしけは。ものうきやうす也○いきたなくは。ねぢい也甚だ眠きと也○かのあかつきをは。唐詩に。春眠不覺曉處々啼鳥聲とあるをいふなり。

首夏小兒に喩

首夏小兒に喩す

花にそめつる心も。やう〳〵にさめはてぬれば。今さらに夢のやうあるに。夏のはゞめのあらひとて。いつしかとまたるるものを。なはおとつれぬは郭公のつらきにはあらで。をりふしのはやければなるべし。」かうやうのことは是ばかりに

はあらゞ。年若き人々の中には。ふみよめば。すなはちに。博士となられぬをうらみ。ものかけば。たちまちに名筆にかずまへられぬをあげくは。これも時節のはやければありけり。」されば。あにごとも心にかけて。おこたらでつとめたらむには。かの博士とあり。名筆にかずまへられむもかたきにはあらざるべし。」もろこしの人も大器晚成としいへれば。ねんゞてつとむることそよけれ。と家の子に打むかひてものがたりするをりしも。玄げりあふ。若葉の風。そことゐくそよめきて。郭公をもよほし顔ゐるもをかし。」

俗解 ○かうやうは。斯樣也○かずまへられぬは。加はらぬと也○大器晚成は。老子の語也。すぐれたる人となるには心長く勉強せざればならぬといふ事の假令(タトヘ)也○ねん

ドては。忍耐して也○もよはし顔は。再促するやうすの意也。

待郭公

おほよそまつものゝなかに。必ずといひてたがはぬは月あり。たかひやすきはつれあき人あり。遠はドともあくたかふとも定めがたきは郭公ありけり。きのふけふは。吹風のけはひもたゝあらず。青葉のえげりたるさまもゆかしげあれば。この頃すぐさず來鳴くなるべしと待れつるを。よべは雨さへふりいでつればいでやと思へど。いたづらにあけにき。けさてそ此の露のかわくますくさずもらすらめ。と思へど必ずとは定めがたきものから。おほろけにはまたぬものを。かうやうのをりてそ。忍ひねにても聞てましかば。いかにうれ

しきかぎりならましとおぼゆれ。さてはかの初音の僧正の如く。郭公の何がしと世に笑はるゝとも。たゞ人の口にまかせてありあんかし」

俗解 ○いでやと思へどは。イヤマウ鳴べしと思へど也○もらすは。聲をたつると也○ものからは。ものではあり○あがらん○おほろけは。あみ一通り也○ましかばは。マシヤウナラ也○ならましは。デアリマシヤウ也○初音の僧正は。權僧正永縁(エイエン)のと也。永縁。きくたびにめづらしきかあ郭公いつも初音の心地こそすれ」とよみしより人に初音の僧正といはれしとぞ。

野月

を舟に棹さしてせきへきの月を見るのみ。あに月みるあら

んや。「たをらばおちぬべき萩の露おもげなるも。立よらばあびかんとすある女郎花のすがたあまめけるも。とりぞりにえもいはれぬ野べあるに。月はひんかしの山のは遠くほのめき出て。むしのねはたうちむるが如く。うたふるが如くなるも。いとあはれふかしときくものは。我と大空の月ばかりあるべし。かく思ふをりしも。いとあやしげをる人かげ見えて。

よのうさをしらずがほにもすむものは雲ゐの月とわれとありけり。」とさゝやかにひとりごつは。かの羽衣きたるたうドのたくひにやと。玄ばしうちかたぶかるゝに。月もまたぶきたるはいと〳〵をかしかりき。」

俗解 ○せきへきの月とは。宋の蘇東坡が赤壁賦をいへる也○たをらば云々は。源氏帚木巻に。をらは落ぬべき萩の露とあり○あまめけるは。うるはしき也○とりぞりにはは。ドレモコレモ也○さゝやかは。小聲にて也○ひやりづつは。獨語也○羽衣は。天人の服也。竹取物語に。天の羽衣とあり。後赤壁賦に。夢一道羽衣蹁躚とあり○うちかたぶかるゝは。首を垂て物を考へる也。

故郷鹿

玄るよしてかりにいきける人は。いづれの世にかありけん。いとなまめきたる女はらからすみけるはたいかある所ありけん。あれはて〻昔のあともあきあらのわたりあるに。秋やゝふけて。里のあのかすかにこゑの聞ゆるは。あはれしのぶのみだれ。これもつまとふたぐひにやと思ひやられて。

いちはやきみやびをしかの聲すあらかすがにつゝく
ならのふるさと。」とかきつけつれど。を鹿もしおもふやうあ
らば。おま人わろしといかにうらむらんかし」

俗解 ○玄るよし玄ては。由所ありて也。是は伊勢物語に
昔男ありけり云々。あらのみやこ春日の里に玄るよし玄
てかりにいきけり云々。とあるによれる也○あまめきは。
うるはしきと也○女はらからは。女兄弟也○玄のぶのみ
だれは。伊勢物語に忍ぶのみだれかぎり玄られず」とある
をいふ也。忍ぶ心の亂れたるをいふ也○いちはやきは。甚
早き也○みやびをしかは。風流の鹿といふと也○なま人
わろしは。ナマナカ人惡キ也。

千鳥

あのりそやつまん。かひやひろはんといひし頃は。日もいと
のどかにて。長き日あかず人のうちむれしを。此のころはき
よきあぎさにかげだになくて。聲たつるものは千鳥ばかり
ありけり。」みしかき日のならひとて。うち玄ぐれつつ磯山く
らくあるほどに。氷るばかりの月かげ波路はるかにさし出
たり。汐のひくかたに遠く近くこ玄の聞ゆるは。心もひかる
ねやうあれど。いとさむきに。

濱千鳥なつにしあらば磯山にたびねしてだにきかま
しものを。」とはあまりによしあしごとよ。とわれあがらをか
し。」

俗解 ○あのりは。はだはらと云海藻也。催馬樂にあのり
そやつまん見や拾はんとあり○長き日云々は。春の末夏

の始のころのさま也○かけたにあくは。人の影もなきと也○よしなしごとは似合しからぬを也。

歳暮

文机にうちむかひてふみをのみ友とするやどは。世の中をいとふとにはあらねども。おのづからとひくる人のまれあれば。年のくれになりぬとてつねとかはるとはあかめれど。妻兒どもの人まねに春のまうけすとて。なにやかやといひのしるをうちきくばかりぞ常とはかはりていとかしまし。されど垣のもとに霜かれて殘れる耳あぐさの名をめでつつ。何ごともいとはしきことはきかじと。心におきてたれば。なほいとしづけし。しかれどもたゞ此のふみこそとしのうちにはかきをへてめ。と思ふばかりぞ。よの人よりはいとい

とあきわさなりける。」

俗解 ○春のまうけは。春の衣服などの用意也○いひのしるは。いひ騒ぐ也○耳なぐさは。倦耳也木の下あぐに冬ものこれる草也○おきてたればは。定めてあれば也○いとなきわざは。いとまあきわざ也。

大かたは。是等の類おれば。あずらへて知るべし。さて上の文中に歌を添へたる文が多くあれど。歌は添てもそへずともに隨意にてよろしきあり。

第七　序跋文例

序跋文も別の意なし。人の著書に叙するときは。その人又その書を稱賛するとあり。自序はその書の概意あどを述るが通例也。跋も大かたは同じやうなれど。跋は多くは賞譽の意

を述ます。即ち左にその例を示すべし。

書畫帖序

空蟬のよに。ふみばかり人の心をよろこばするものはあらざりけり。」さるはからやまとの歌文のみふみには非ず。花紅葉は春秋のふみなり。木石は山川のふみなり。されば鳥のあとうつしゑ。はた人の心をなくさむるはふみあるべし。」わが友川崎千虎ぬし。書畫帖をおこせて。おのれにものかいつけてよ。とあるにひらきみれば。歌詩はなもみち山川のけしきあど。ひと〳〵の筆して。さま〳〵にかきつらねたるいとをかしき帖ありけり。あはれよの人のこゝろをよろこばするもの。此のまきに云かめや。とてかくなむ。」

俗解 ○空蟬のは。世とかゝる冠詞也○とりのあとは。文字のと也○うつしゑは。畫也○おこせては。おくりこさせて也○云かめやは。如んやといふと也。

女子日用文例自序

ふみのみち。日にすゝみ。月に熾りなるみ世あれば。をしへの書もたらはぬことはあかめれど。小學の女子どもの日用の文にいたりては。あるは高尚にすぎて耳とはき。ある舊習になつみてわづらはしき。あどなきにしもあらぬは。いとくちをし。おのれこたびこれらのなのめなるふしふしをはぶきて。つとめて簡易なるをむねとかきつゞりつれど。こもまたその女子にふさはしきやいあや。そは世の人さだめあむかし。」

俗解 ○耳とはきは。迂遠といふを也○わづらはしきは。

煩雑といふ也○いとくちをしは。甚殘念也○こたびは。此度也○あのめあるふし〳〵は。滿足せざる件々也○ふさはしきやは。相當なるやのと也。

伊勢物語跋

すべてふるきふみに。註釋(チウサク)どもを加ふるは。あしきことにはあらねど。よく心を用ゐざらむには。あやまちあしとしもいひがたし。さてそのあやまちあらんには。作者のためにいとはしきわざなり。されば作者の心をこゝろとして。さて註釋すべきあめれど。今の世の人だにおなど心の人はあらぬを。まして。いにしへと今とは。よのさまもその詞もおなどからぬば。作者の心にかなはんことは。いともかたきわざなりかし。」賀茂の翁は。はやくより云か思へるにや。此のふみは註釋を

省きて。たゞ本文をのみ校正したる。いとかしこきわざなりけり。おのれもさいつ頃。土佐日記。十六夜日記などいふを。おなゞやうに本文のみ校正しつれば。今このふみをみてはからずも翁とおなゞ心にてありき。と思ひいでらるゝまゝにかくあむ。」

俗解　○あやまちあしとしも云々は。却て誤謬を傳ふるをいふ也○いとはしきは。俗に氣の毒也○すべきなめれどは。すべきことであるとみゆれど也○人だには。人デモ也○よのさまは。世態也○賀茂の翁は。賀茂季鷹といひし人也○云か思へるにやは。さやうに思へるあらん也○いとかしこきは。甚よろしき也○かくなむは。此の如くいふの意也。又此の如くであるとも解すべし。文章の結尾に多く

ある詞であります。

大概は是らの類なり。此の他にも尚多く掲げて去めしたくは思ひつれど。紙數に限ありて甚ながくなるもあに。止を得ずこれにて大尾と致しました。

雅俗諸體作文口授　終

發兌書肆

日本橋區本町三丁目　金丸善港商社堂
仝通り三丁目　小林新兵衛
仝三丁目　博聞社
京橋區銀座四丁目　小林喜右衛門
日本橋區新大坂町　上田屋榮三郎
仝本石町二丁目　藤岡屋慶次郎
仝通り油町　岡村庄助
下谷區池之端仲町通り　勧文堂
本所區小泉町　中西屋書店
神田區表神保町　松村九兵衛
大坂心齋橋南詰へ入　三木佐助
仝北久寶寺町四丁目　柳原喜兵衛
仝北久太郎町四丁目　片野東四郎
尾張名古屋玉屋町　川瀬代助
仝本町　目黒十郎
越後永岡　張治平
仝　西澤喜太郎
信州長野　宮坂榮次郎
仝上諏訪　吉田愼乎堂
上州高崎　木暮貞七
仝

29
1
116

明治二十三年十二月二十一日印刷
仝　二十三年十二月廿四日出版

正價金三十五錢

著述者　東京府士族　鈴木弘恭
仝平民　篠崎吉十
發行者　仝平民　梶川善七
印刷者　仝平民　中村善七
仝　杉原辨治郎

神田區美土代町四丁目五番地
日本橋區大傳馬町二丁目三十番地

發兌書肆　敬文堂
積玉堂

版權所有

079056−000−7

特19−524

作文口授

鈴木　弘恭／述

M23. 12

DAC−2956

清軍

附一冊